雪の山村かけめぐり

（冬期酪農講習会に出席して）

三浦梧楼

昨年末から今春にかけて、岩手県や、北海道は後志、胆振、日高、十勝、北見と地元石狩管内の各地酪農講習会に出席させていただきましたが、その主催団体も農協、町村、公民館、酪青研、酪農振興会、部落懇談会、乳業会社等で参集者も従つて種々の階層の方々で立地条件や経営規模も区々でありますが、何れもが熱心であるのに感激しました。

飼料栽培のご相談に応じ得る等とは毛頭考えてもおらず、雪の深い農場で冬眠をむさぼつているよりは、出来るだけ現地の事情を勉強して、将来の仕事の進め方の参考にしたいと思つて出掛けただけに、聴講者の真剣な態度には却つて恐縮して参りました。

雪の深い私共の農場も黒土があちこちに見え、土手にはフキのトウがふつくらと出て来ました。岩手辺りではもう水田裏作のライ麦や、イタリアン等が伸び始めていることでしょう。愈々活気のある農耕期に入るわけですが、茲に今冬の講習会に出席しての所感をまとめて一つの区劃とし、更に将来への前進の資としたいと思います。

(一) 牧草、飼料作物の栽培についての関心は非常に高まつて来ている

乳牛は農場残渣や、山野草のみで飼うものという考え方は、もはや過去のものになつて来ているようです。経営の面からみても、稿稈類や、山野草では購入飼料が多くなつてとても現在の乳価では採算がとれない。また酪農家の間で大きな問題となつている空胎にしても、繁殖は何も特殊な営みではなく、健全な体内において行われる普通の生理であるといわれれば、矢張り良質の粗飼料が乳牛の空胎を防ぐためにも必要である事がわかり、酪農合理化への近道は、草地を改良し、飼料を耕作し、健康な牛を育て、安価な牛乳を搾る事でという事が逐次理解されて来た結果であろうと思われます。

(二) ラデノクロバーの単播をやめましょう

今の酪農家でラデノクロバーを栽培していない方は殆どない位よく普及しております。しかし残念な事には単播が非常に多い事です。その結果は放繋牧の時間が長びいたためにガスで牛を殺したり、降雨の多い時には下葉が腐うたり、病害虫の発生が多くなつたり、折角の集約放繋牧地も十分その目的を達成出来ない事になり勝ちです。ラデノクロバーも他の牧草栽培と同様に禾本科との混播を行つて、前記の弊害を排除して貰いたいと思います。

東北、北海道を通じて目下の処、理想的だと思われる混播例を申し上げますと、

ラデノクロバー
ペレニアルライグラス
オーチャードグラス
ボンド
一、二年の基本草種
三年目以降の基本草種

であります。

またラデノ単播圃場に追混播を行う場合は早春にラデノクロバーにデスクハローをかけ、窒素肥料を主とした施肥を行い、イタリアンライグラスを反当一封度内外撒播しますと混播草地を造成する事が出来ます。

(三) 永年牧草地は混播種類が少いようです

北海道の永年牧草地中七年以上のものが全牧草地の五五%にも達し、その面積実に五万三千町歩といわれております。そしてこれらの牧草地はオーチャードが優占し、荳科の牧草は殆ど認められませんが、これは播種当時に多くの場合赤クロバー、チモシー、オチャードの少数混播です。赤クロバーは大体三年で寿命が終りますから、その後はオーチャードがハビコリ株化して来るわけです。もつと栄養価のある草、またオーチャードの株化による刈取、耕起作業の困難から逃れるためにも長年に亘つてオチーャードと競合する草種も加えたいものです。また気象の災害回避も多種類混播が効果的です。土質によつても種々組合わせが変つて来ますが、一般的なものとして次の混播例はどうでしょう。

赤クロバー　二・〇
チモシー　一・〇
オーチャード　一・〇
基本草種

ルーサン
ブロームグラス
各　〇・五～一・〇
早魃に耐え、寿命長し

アルサイクロバー
メドウフェスク
各　〇・五～一・〇
冷涼多湿に耐える

(四) ツナギ飼料を準備すること

牧草の一～二番の切れ目、早春、秋のエンシレージ切込後の一カ月のツナギ飼料等は期間からみても、また量的にも大したものでないという処に等閑視され勝ちですが、しかし基礎飼料の移行時期に飼料不足を起すと乳量が下り、この一旦下つた乳量は仲々回復しないものです。ツナギ飼料の準備は基礎となる飼料の種類によつて異なつて来ますが、埋草、根菜、乾草、牧草の生草を基礎としている場合についてみますと

(a) 早春の青刈　長い冬の舎飼いは生鮮多汁飼料に不足勝ちですから一日も早く青草につけてやることが必要ですが、この目的に合するものにイタリアンライグラスの灌漑栽培、レープの秋播き、ライ麦の秋播きがあります。イタリアンライの灌漑栽培は東北地方の岩手の一部では既に実施されている方もあります。レープ、ライ麦は北海道でも各地で実行可能です。しかもこれは畑地の裏作で出来る有利なものです。

(b) 夏のツナギ　夏は主として牧草の生草（刈取、放牧）が主体となりますが一、二番の切れ目が一カ月あるわけですがこの時期に適当なものとしては紫丸かぶの春播きが先ず挙げられます。早春播種した紫丸かぶは丁度牧草の一番刈前後に収穫期となり、収量も非常に多く、乳牛一頭について二畝内外も準備しますと牧草一番刈後の飼料不足は解消されます。更に春まきエンバクの青刈りもこの時期のツナギとして有利です。即ち早春に畦幅一尺内外とし、反当エンバク一〇升、青刈用豌豆三升（または

ベッチ一・五升）にイタリアンライグラス一封度を混播しますと、六〇～七〇日の丁度牧草一番刈り後に刈取適期となります。

(c) 秋口のツナギ　デントコーンその他の青刈類をサイロにつめた頃から口開きまで、即ち十月中旬以降から約一カ月位の期間でありますが、根菜を栽培している場合は頸葉（トップ）の利用もありますが、特にビートトップの過給（日量六～七貫が適当）は家畜の健康上も悪く矢張り他の種類のエサの準備が必要であります。

先ず第一はポンキンを挙げることが出来ます。九月上旬から十一月一杯の間利用出来る多収な多汁質飼料で家畜の嗜好もよいものです。

また夏作跡地を利用するデントコーンの青刈（北海道は七月中旬、東北は八月上旬頃まで播種）も畦幅一、二尺位、株間五寸の二、三種（反当六、七升）播きにしますと一、〇〇〇貫以上のものがとれます。同じ夏作跡地利用に前作の刈取前一カ月位に立毛中にイタリアンライグラスを反当二～三封度播種しますと霜の来る頃には反当七～八〇〇貫の良質の青草が放牧または刈取りで得られます。

(五) 冬期の根菜利用があまりにも少なすぎる

最近は冬期間の生鮮多汁飼料の根菜が、乳牛の保健上、また産乳のため、更に乳質改善のためにも必要である事が認識されて根菜栽培も逐年増加して来ておりますが、十分に利用している農家はまだまだほんの一部に過ぎません。酪農の先進地デンマークではどの位根菜を用いているかを調べてみますと次のようです。

	年間必要総飼料に対する根菜の割合(%)	同上青草利用割合(%)
デンマーク	三三・八	三三・七
北海道	四・九	三五・九

乳牛の経済調査をみても夏の時期は北海道も良好ですが、これは青草の利用度が高いからでしょう。冬の時期には飼料費が嵩んでおり、これはもつと、飼料根菜の利用を積極的にすべきを私共はデンマークの飼料利用の状況からも教えられます。

根菜の第一は家畜ビートでありますが、土地のヤセている処はルタバガ、跡作利用ではカブが有利であります。

(六) 玉蜀黍の上手なつくり方が行われて来た

数年前に北海道酪農からデントコーンを駆逐しようという声も起きましたが、デントコーンはなんといつても作り易く、また反収の挙がる作物です。しかし土地を瘠薄にし、また栄養価（特に蛋白含量）の少い欠点は確かにあります。そこで玉蜀黍栽培にはこれらの欠点を補うような作り方をする事が大切でありますが、その具体的な方法として荳科の混播、寒冷地では青刈大豆、北海道の中部以南では大葉つるまめ、カウピーの混播が漸次とりいれられ蛋白の補給や地力剝奪を幾分でも緩和しようとする事に留意されて来ております。更にデント自体の栄養価を高めるためにF_1の利用も逐次盛んになつて来ております。即ち道東北部ではU－二八、複交四号を、また道中央部以南は複交五号が主として利用されております。このF_1の利用も埋草用デントを全部これに切換えますと、量的に三～四割不足（エローデント）となりますので、混播が有利でしよう。この混播も、従来白と黄色で行つていたような種子混合の混播は不利で交互畦栽培が有利であります。即ち黄色デント三～四畦を播き次いでF_1の採実の多いものを三～四畦というように交互に畦まきすることです。このようにしますと、品種間の競合も具合よく行き、また切込みの際も両者のよく混じた、品質の均一なものが得られます。

(七) 水田畦畔の草生改良は注目すべき問題

牧草のもつともよく生育する場所、それは水田のアゼであります。土質はよし、更に高温の夏季には水分が豊富で非常に草の生育に適しております。

この畦草を今までの夏までより生育しない野草にかえて、牧草を導入しますと反当二〇〇〇～三、〇〇〇貫の良質草が得られます。特に北海道では最近冷害回避の一手段として深水灌漑が行われますが、その結果として高畦が必要となり、愈々畦面積が大きくなります。一部先進者はこの畦にラデノクロバー、ペレニアル、オーチャード、レッドトップを播種して畦草を主体とした水田酪農を有利にやつている方もあります、只水田の畦畔草は時期によつては肝蛭（カンテツ）の寄生がありますが、これも緬羊の場合に準じて薬剤で十分駆除が行われます。また肝蛭の被害を考えて乾草として利用している方もあります。

(八) 山野草地の改良時期と、草地管理について注意していただきたい事

山野草地の改良について、最近は開墾せずに、簡易耕起、または無耕起で牧草を導入する手軽な草地改良が行われておりますが、その失敗の殆どは春播きで、雑草に圧倒されて折角の発芽した牧草も何時の間にか消滅してしまうわけです。

そこで春播きの場合は絶えず掃除刈りを行い牧草の生育を保護することも大切ですが一般には野草の生育の衰える晩夏以降に播種すると掃除刈りの手数も省け、牧草の生育も良好となります。

北海道では八月上中旬、東北では九月上旬頃のいわゆる秋の枯野に入る直前が好季です。

草地管理については特に積雪の少い太平洋岸では冬遅くまで放牧を行つておりますが、家畜は牧草の根元まで食い荒すため冬枯れが激しく、折角導入した牧草も冬枯れで荒廃を早めております。牧草の場合は秋には少くとも一カ月は生育させて越冬に入ることが必要で、笹のような根の強いしかも家畜は葉だけ食う草と同様に冬まで放牧することは厳禁すべきであります。

以上各地での所感を総合してみましたが、何も事新しいものではなく、言い古された事柄ではありますが、案外実行されていないのは残念です。また細かい問題について未解決の問題をいくつか得たのも今冬の私共の収穫でした。これらについて早速今春から調査、研究に著手、一日も早く解決して酪農の前進に幾分なりとも資したいと存じております。

雪の山道を馬橇で迎えに来てくれた青年の元気な顔、発車間際の駅まで追いかけて来て混播の質問をされた開拓地のオジサン、深更まで酪農のユメ、草作りのユメを語り合つた部落会の方々等、なつかしく楽しい想い出ですが、それに対しての私の不備を心からお詫び申し上げ、再会の日を楽しみに相互に今年の草作りに頑張りましよう。

（雪印種苗上野幌育種場）